

中学生における樹木画の全体的印象と精神的健康に関する研究

The total impression of Tree Drawings
and the mental health of junior high school students

小坂 淑子

(東京成徳大学大学院)

小林 厚子

(東京成徳大学)

Yoshiko KOSAKA (Graduate School of Psychology, Tokyo Seitoku University)*Atsuko KOBAYASHI* (Tokyo Seitoku University)

要 約

本研究では、中学生における樹木画の全体的印象を数量的に分析し、描画者の精神的健康調査票 (GHQ-28) 得点との関連を調べた。樹木画の全体的印象を大学院生 3 名により評定し因子分析を行ったところ、3 因子が抽出され、先行研究同様「エネルギー感」「コントロール感」「成熟度」と命名された。各因子得点と GHQ 得点の相関分析を行ったところ、評定者による「エネルギー感」得点が高いことは描画者の「身体的症状」得点が少ないことと有意な相関を示し、「コントロール感」得点が高いことは「社会的活動障害」得点が低いことと有意な相関を示した。一方「成熟度」得点は「社会的活動障害」得点が高いことと有意な相関を示した。この結果から、中学生が描く樹木画における「成熟」の持つ意味を改めて検討する必要性と、集団法であったことが描画の過度の詳細さに影響した可能性が示唆された。個別で安全な環境での描画の実施と「うつ傾向」得点も含めた検討が今後の課題と考えられた。

キーワード：樹木画、全体的印象、精神的健康、中学生

問題と目的

バウムテストには全体的印象による情報と、個別の指標から得られる情報の二つがある。青木 (1981) は、バウムテストを解釈する上で、多義的な解釈指標の中から、直観で得られた全体的印象に基づいてより適する仮説を拾う必要があるとし、その重要性を指摘している。また全体的印象とは“描画から受ける雰囲気・印象のこと”であり、描画者の雰囲気と相当適格に対応するものだとしている。

全体的印象は主観的であり、また訓練によって上達しうるものであるとされている。これを評定尺度で数値化する試みがなされており (一谷, 1975、高橋, 1983、鈴木・鍋田, 1999、鈴木・岸, 2006)、S-D 法を用いて、印象を形容詞対に置き換え因子分析的検討を行っている。鈴木・鍋田 (1999) は①エネルギー感②成熟度③コントロール感の 3 つの下位尺度による全体的印象評定尺度を構成している。教育現場での集団実施による研究 (鈴木・岸, 2006)、高橋 (1983) によるキャンプ療法の前後で登校拒否児の樹木画の変化を検討

したものなどがあり、現在までの全体的印象評定を数量的に記述する試みでは、青木（1988）の指摘する3つの視点を支持する結果が示されている。しかし未だ十分な検討がされているとはいえ、研究課題のひとつとされている（津田・林，1992）。

Newman & Newman（1988）は、青年期の初期段階を“急激な身体的変化、重要な概念的成熟、仲間からの承認に敏感になる、などによって特徴づけられる”とし、“自分の中にある強い情動を受容し、それを『狂気の沙汰』であるとか『場違い』なものと考えないこと”を適応するために重要なものと位置づけている。

金井・上村（2007）は、中学生の適応感・自己概念・精神的健康に関する研究のなかで、肯定的で適切な自己概念を形成するためには、“学級内で認められていることと、侵害行為を受けていないこと、両方について感じていること”が必要であるとし、人から批判されたとか、受け入れられなかったという経験が、抑うつに関連しているという可能性も示唆している。一方則定（2008）は、中学生における孤独感と学校適応・精神的健康との関係についての研究のなかで、落合（1983）による孤独感の類型をもとに“人間同士は理解・共感できないと思っている”、“人間の個性性に気付いている”の両方にあてはまる一群が精神的健康において最も悪い状態であり慎重で丁寧な教育的配慮が必要である事を示唆している。

今田（1999）は、日本学校心理学研究会が1996年に行った調査に言及し、中学生の悩みごと・こまりごとについて友人関係に関する悩みが最も多かったことを指摘し、“それまでの自己イメージが自分を支えるものにならず、しかし新しい安定した自己イメージをもつこともできずにゆらいている思春期の子どもたちが、『強迫的な他者志向』（岸，1998）によって自分の外にある価値に基準を置きその価値がより優先されるような行動をとって、そのゆらぎから身を守ろうとしている姿を表しているのではないだろうか”としている。

思春期に入り、変化していく身体を体感し、経験したことのない衝動や情動が訪れるなかで、集団の中で同質性を求めたり組織における役割を果たしたりすることを通して、他者から受容されているという感覚を持てることが、青年期後期に自己のアイデンティティを形成する基盤のひとつになると考えられる。

樹木画では一般的に、描いた人の生活一般、自己とより広い環境に関する感情が表現される（Bolander，1999）。また健常者のバウムテストにおいては全体的印象が重要視される傾向にある（鈴木・鍋田・塩崎，2002）。本研究においては、中学3年生を対象とし樹木画を集団法にて描いてもらい、全体的印象の評価について数量的な分析を行うとともに、中学生の精神的健康との関連を検討することとした。

方 法

調査対象 東京都内の私立中学に在籍する3年生240名のうち、欠席者を除く235名が調査対象となった。うち、欠損を除く有効回答数は203名（うち男子130名、女子73名）である。年齢構成は14歳が151名、15歳が51名、不明が1名である。クラブ活動への参加状況は、文化部のみに所属（31名）、運動部のみに所属（97名）、文化部と運動部の両方に所属（73名）であった。

調査日時 2008年6月17日（5時限目）である。無記名の質問紙と画用紙を用い、HRの時間に実施した。

調査手続き 校長および学年主任教諭に調査協力を依頼し、調査に用いる質問項目の検討を行った。調査に妥当と考えられた項目をホームルームの時間（45分）を用いて、各クラス担任の先生から質問紙と画用紙および鉛筆の配布を依頼し、欠席者5名を除く235名に同時に実施した。

調査内容 1. 精神健康調査票（GHQ28）：中川・大坊（1985）による、Goldberg（1978）の

General Health Questionnaire の日本版である日本版精神健康調査票をもとに作成された28項目からなる。この質問票においては、「健常から異常へ」という一次元的な軸を考え、その軸からみでの程度の異常が存在するかという点から判別する」という一次元的な考え方を採用し、日常生活を通して健常な精神的機能が持続できているかどうかを質問するものである。

学校での集団実施であることから、話し合い後「うつ傾向」の下位尺度にあたる7項目については除き、「身体的症状」「不安と不眠」「社会的活動障害」の下位尺度にあたる21項目を実施した。

2. 樹木画：A4版の画用紙、2Bの鉛筆一本を配布し、質問紙に「配布された別紙の表面に、1本の実のなる木をできるだけ十分に描いてください。(2Bの黒鉛筆と消しゴムを使用すること)」と教示を記した。実施にあたっては各クラス担任の教師に、質問が出た場合への対応として①上手下手を問うものではないこと、②実を書いても書かなくてもどちらでもいいこと、③付属物は禁止ではないこと、④消しゴムを使って何度書き直してもかまわないことを伝えた。制限時間は45分の授業時間内の制限以外には設けることはしなかった。

分析方法 樹木画の全体的印象評定を大学院生(修士課程2年)3名で行った。評定項目は、鈴木・鍋田(1999)、高橋(1983)、一谷(1975)を参考に30項目を選定し、5件法のS-D法にて評定を行い、評定者間の一致度について級内相関係数を算出し、因子分析を行った。GHQの得点はLikert方式に基づき算出し、全体的印象評定における各因子の得点とGHQの合計得点および下位尺度得点の相関分析を行った。本研究の分析にはSPSS(ver. 11.5 J)を使用した。

結 果

3名による印象評定結果の一致度を級内相関係

数で計算したところ、 $\alpha = 0.78$ であった。

評定得点の平均値を用いて因子分析を行った。共通性の低かった項目13(曲がった—まっすぐな)を削除しバリマックス回転後に、3因子を抽出した。Cronbachの α 係数を算出したところ、尺度全体で0.92、第1因子で0.94、第2因子で0.90、第3因子で0.79であった。

第一因子は「にぎやかな—さびしい」「のびのびした—萎縮した」「勢いのある—勢いのない」など、樹木画から受けるエネルギー感に関する項目が多いことから先行研究同様「エネルギー感」の因子と命名した。第二因子は、「幼稚な—幼稚でない」「未熟な—成熟した」など樹木画の詳細さや複雑さに関する項目が多く「成熟度」と命名した。青木(1988)が三つ目の因子としている「豊かさ」もここに含まれると考えられる。第三因子は「とげとげした—丸みのある」「なめらかな—なめらかでない」「いびつな—整った」など、コントロールに関する項目が多く、「コントロール感」と命名した。因子構成は、先行研究に近い結果が得られたと考えられる(Table 1)。

各因子得点とGHQ得点との相関分析を行ったところ、「エネルギー感」得点は「GHQ合計点」の間に -0.16 と10%水準で弱い負の相関傾向を、「身体的症状」得点との間に -0.19 と5%水準で負の相関を示した。「成熟度」得点は「GHQ合計点」の間に 0.16 と10%水準での有意傾向を、「社会的活動障害」得点との間に 0.19 と5%水準で有意な正の相関を示した。「コントロール感」得点は「社会的活動障害」得点との間に -0.22 と5%水準で有意な負の相関を示した(Table 2)。

Table 1 全体的印象評定の因子分析

	第1因子	第2因子	第3因子	共通性	Cronbach の α	
第1因子：エネルギー感						
17	にぎやかなーさびしい	0.880	-0.066	0.168	0.804	
8	のびのびしたー萎縮した	0.860	-0.025	0.109	0.758	
14	生き生きしたー生き生きしていない	0.857	0.155	0.284	0.833	
5	勢いのあるー勢いのない	0.835	-0.034	-0.251	0.772	
2	弱々しいー力強い	0.815	0.066	-0.026	0.678	
24	空虚なー充実した	0.814	0.140	0.327	0.661	
1	堂々としたー貧弱な	0.800	0.058	0.098	0.785	
19	貧困なー豊かな	0.768	0.351	0.275	0.789	
12	頼りないーしっかりした	0.753	0.199	0.180	0.638	
16	動的なー静的な	0.705	-0.107	-0.098	0.513	
25	開放的なー閉鎖的な	0.631	0.082	0.246	0.465	
11	大きいー小さい	0.611	0.025	0.060	0.386	
26	暗いー明るい	0.594	0.001	0.487	0.592	
23	安定したー不安定な	0.518	0.291	0.402	0.513	
22	濃いー薄い	0.426	-0.165	-0.075	0.220	0.95
第2因子：成熟度						
27	幼稚なー幼稚でない	-0.058	0.931	0.063	0.875	
4	未熟なー成熟した	0.259	0.874	0.194	0.870	
9	写実的なーイラスト的な	-0.261	0.787	-0.308	0.790	
20	現実的なー非現実的な	-0.273	0.786	-0.100	0.698	
28	繊細なー粗野な	0.012	0.751	0.368	0.718	
18	立体的なー平面的な	0.385	0.658	0.032	0.578	
6	単純なー複雑な	0.479	0.594	-0.089	0.581	
21	乱雑なーていねいな	0.123	0.582	0.525	0.646	0.88
第3因子：コントロール感						
10	とげとげしたー丸みのある	-0.001	-0.258	0.780	0.673	
3	なめらかなーなめらかでない	0.110	-0.106	0.677	0.469	
29	いびつなー整った	0.168	0.486	0.647	0.676	
30	かたいーやわらかな	0.070	0.036	0.596	0.363	
15	まとまりのないーまとまりのある	-0.088	0.400	0.568	0.497	
7	バランスの悪いーバランスの良い	0.232	0.388	0.539	0.804	0.82
	因子寄与率 (%)	30.5%	19.1%	13.5%	計63.1%	0.92 (尺度全体)

Table 2 全体的印象と GHQ 得点の相関分析

	GHQ 計	身体的症状	不安と不眠	社会的活動障害
第1因子得点 (エネルギー感)	-0.16 †	-0.19 *	-0.10	-0.13
第2因子得点 (成熟度)	0.16 †	0.13	0.10	0.19 *
第3因子得点 (コントロール感)	-0.10	-0.05	0.01	-0.22 *

注) † $p<0.1$ * $p<0.05$

考 察

本研究における印象評定は、臨床経験1年以内の大学院生によるが、鈴木・鍋田(1999)、高橋(1993)らの先行研究と近い因子構成を得た。全体的印象を捉える上で、青木(1988)の観点である「エネルギー感」「コントロール」「豊かさ」について、それぞれ第一、第三因子、第二因子が対応し、支持する結果となった。

第一因子は大きさ、筆圧、筆勢などに関係し“基本的なエネルギー感(青木、1988)”をあらわすものと考えられる。

第二因子は樹木画の詳細さ、複雑さに関係している。要素の数、描線の使いわけ、陰影、塗り、幹や実用の細かな表現など青木(1988)の指摘する「豊かさ」指標と関係していると考えられる。また、発達に伴って樹木の描写がより写実的で現実的になることは多く指摘されており、「成熟度」と命名した。

第三因子である「コントロール感」の因子は、上下、左右のバランス、各要素間の均合いが関係し、パーソナリティ統合の程度、検査時の情緒的安定の度合いなどに関連があるとされている。

GHQ得点で得点が高いことは健康度が低いことを表す。GHQ得点との相関において、第一因子が「GHQ合計」得点と有意傾向にあったこと、「身体的症状」得点と有意に負の相関があったことは、身体が元気と感じられることが、エネルギー感のある樹木画という印象を解釈者に与えることと関連していることを示唆したと考えられる。

一方、第二因子が「GHQ合計」得点に対して有意傾向を示し、「社会的活動障害」得点に有意な正の相関を示したことは、何を意味するのだろうか。中学生が「自らの個別性に気付く」ことにより孤独感が増すという先行研究があるが、豊かな描写は、他との差異をもたらす。この時期に、より客観的に現実を直視できる視点を持っているということは、自らを客観視することにつながり、

その個別性に気付きやすくなることが考えられる。それは、早い段階で次の発達課題に出会うことにも関係し、具体的に社会活動をすすめていくうえで難しさを感じることを示唆していないだろうか。

また、“豊かさの指標は、どの特徴も極度になれば、その描画にとっての個性よりは、不安-強迫を帯びる。描画順序を確認するだけでなく、許容的な雰囲気の問題もあり、描画中は見守ったほうが良い(青木、1988)”とあるように、今回教室での集団実施を行ったが、樹木画を行う上では安全な環境とはいえず、不安感が高まりやすかったという可能性も考えられる。どちらの可能性が当てはまるかは、個別に安全な環境で描いてもらい比較する必要がある、今後の課題と考えられる。

第三因子である「コントロール感」が高いことが、「社会的活動障害」得点と負の相関関係にあったことは、評定者が描画を見てエネルギーのコントロールができていると感じることと、描画者の行動上の社会適応に関連があることを示唆している。また、この項目はGHQの下位尺度のなかでも「うつ傾向」との関係が深いものと予想され、今後の検討課題と考えられた。

結 論

樹木画の評定者による全体的印象の因子構造が成人を対象とした研究とほぼ同様であり、描画者の精神的健康と関連があることが確認された。

樹木画の全体的印象において評定者がエネルギー感やコントロール感を感じることは、描画者の精神的健康がより高いことと関連があることが示唆された。また「エネルギー感」は描画者の「身体的症状」得点と負の相関を示し、「コントロール感」は「社会的活動障害」得点と負の相関を示した。一方「成熟度」は「社会的活動障害」得点と正の相関を示した。このことから、中学生が描く樹木画における「成熟」の持つ意味を改めて検討

する必要性と、集団実施という環境のため、不安感から描画に過度の詳細さがもたらされた可能性が示唆された。GHQの下位尺度である「うつ傾向」を除いたことにより、GHQ合計得点と樹木画の因子得点の相関が有意傾向にとどまった可能性もあり、個別で安全な環境での樹木画の実施と「うつ傾向」得点も含めた検討が今後の研究課題と考えられた。

引用文献

- 青木健次 1980 描画法における全体的印象について 京都大学教育学部紀要 XXVI, 129-140
- 青木健次 1981 全体的印象からバウムテストを診る 心理測定ジャーナル 17(8), 2-7
- 青木健次 1988 バウムテスト — バウム画を表現心理学から読む — 臨床精神医学 17(6), 979-987
- 青木省三 2001 思春期の心の臨床 金剛出版
- Bolander, K 1999 樹木画によるパーソナリティの理解 ナカニシヤ出版
- 榎本淳子 2003 青年期の友人関係の発達の变化 — 友人関係における活動・感情・欲求と適応 — 風間書房
- 一谷彊・津田浩一・林勝造 1975 S-D法によるバウムテストの因子的検討 京都教育大学紀要 Ser. A, 47, 1-16
- 岸良範ほか 1998 改訂版人間理解の心理学 八千代出版
- Koch, C 1970 バウム・テスト — 樹木画による人格診断法 — 日本文化科学社
- 鍋田恭孝 2003 心理検査「バウムテスト」バウムテストの読み方—その効用と限界, 臨床心理学, 3(4), 555-561
- 中川泰彬・大坊郁夫 1985 日本版GHQ 精神健康調査票手引 日本文化科学社
- 中田栄・今田里佳他 1999 子供の自我・自己の成長と学校心理学 日本教育心理学会総会発表論文集 (41), pp. 64
- Newman & Newman 1988 新版生涯発達心理学—エリクソンによる人間の一生とその可能性 川島書店
- 則定百合子 2008 中学生における孤独と学校適応・精神的健康との関係 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 1(2), 17-21
- 落合良行 1983 孤独感の類型判別尺度 (LSO) の作成 教育心理学研究 31, 60-64
- 落合良行・佐藤有耕 1999 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究 44, 55-65
- 鈴木郁子・岸良範 2006 高校教師による高校生のバウムテストの全体印象評定と高校生のパーソナリティ特性との関連 愛知教育大学教育実践総合センター紀要 9, 249-257
- 鈴木慶子・鍋田恭孝 1999 バウムテストの全体的印象評定尺度の構成 — S-D法による因子的検討 — 大正大学臨床心理学専攻紀要 II, 82-89
- 鈴木慶子・鍋田恭孝・塩崎尚美 2002 バウムテストからみた構造的エンカウンター・グループの効果 心理臨床学研究 20(4) 384-393
- 高橋知音 1993 キャンプ療法による登校拒否児の樹木画の変化—バウムテストの全体的印象による評価 カウンセリング研究 26, 19-28
- 高橋雅春・高橋依子 1986 樹木画テスト 文教書院
- 津田浩一 1992 日本のバウムテスト 日本文化科学社

The total impression of Tree Drawings and the mental health of junior high school students

Yoshiko KOSAKA (Graduate School of Psychology, Tokyo Seitoku University)

Atsuko KOBAYASHI (Tokyo Seitoku University)

ABSTRACT

The purpose of this study is to investigate the correlation between the total impression of the tree drawing and the mental health of the participant. The trees are drawn by junior high school students. The total impression is rated by 3 graduate students. As the results of the factor analysis, the 3 factors similar to the preceding study were found, and they are named “Energy”, “Control”, and “Maturity”. The result of the correlation analysis indicated that the higher “Energy” factor score, the lesser “Physical Symptom”; the higher “Control” factor score, the lesser “Social Activity Disorder”. Meanwhile, the higher “Maturity” score is related to the lower level of mental health. The result indicated two things; (1) the necessity to reconsider what the “Maturity” mean in the drawings of junior-high school students; (2) drawing with other classmates may have caused discomfort and it could have affected them to draw too precisely. A further research on individual drawing in a safe place and the examination including “depression” scale are considered to be necessary.

KEYWORDS: Tree-Drawing, the total impression, mental health, junior high school student